数理解析研究所講究録
第272巻 1976年 134-136

Samplingによる検定について

総理府統計局　水野　坦

所謂Samplingによる検定は、通常之と対比して扱はれている推定の場合には、それが具体的な問題への統計的方法としても、理論的にも、概ね、問題なく構成されていると考へられるのに対し、その基本的なところも含めて、問題のある事について、具体的な計算技術的な所迄は触れる事ができなかったが、概念的に論じた。

統計的な方法論として、まず求められるのは、推定の場合と同様、universeについての命題の検定の方法論であり、特定のprobabilityが賦与された、所謂populationでではない場合だが、この第一の場合の検定の方法が、数理的な立場から取り上げられていない為、無力である事を注意し、その解決には新たに適当なmeasureを導入し、それによって検討するなど、今迄の所謂検定とは異った方法を考へる要のあることに言及した。今では第一の処理に、第二の場合――即、ある

populationでの検定——の方法がdistributionの指定を前提としているので不適当であるにもかかわらず、強引にこれを前提として適用されていることを批判した。

その理論の細部は、不明であるが、先程来朝時のW.E.Lemingの論点も上述の所謂検定論の誤用に関はるものと考へられる事などにも触れた。

前記第二の場合も、non-parametricな場合の方が、より必要と思われるのに、Gauss分布を中心としたparametricが多く、non-parametricな検討が行はれていない事に触れ、かかるnon-parametricな且つ組織的な扱いで、検定が再編成される事が望ましいと論じた。

検定の第三はsampleの検定で、基本的には、sampleが同等なrandum sampleか否か問ふ事と思はれるが、これも充分取り上げられてゐらず、non-parametricに分布の相似性を取り上げて、"検定"を構成する必要があると思はれる事などに触れた。

また所謂検定論が、null-hypothesisの棄却を志向する形で構成されているのは、一つの理論的な貢献としても、実際上の推論の方法論としては、探択そのものを志向したものが、直接的には求められてる事に注意し、そのすり替えの危険に言及、報告者等の50年代前期からの立場にも言及した。[1]

〔1〕統計数値表の使い方—ノンパラメトリック検定—
水野 坦 他, 朝倉書店、1954年.